

# 求道の旗手について

——ウパニシャッド対話篇から——

山 口 恵 照

一

ウパニシャッドはよく知られているように、サンスクリット最初期の文献群であるヴェーダに付属するヴェーダーンタ（ヴェーダの終極）として、これまで種々に評価されてきたが、伝道の観点からとり上げること、今日あまり注目されていないようである。しかし伝道文学としても十分の評価に堪えるのがウパニシャッドであり、ウパニシャッドをそのような評価の視座において見るとき、インド思想・仏教の歴史的源流の新たな解明が可能となるのではないかと考えられる。

ところで、ウパニシャッドにおいて伝道とはなにか？ここに「伝道」とは、曾て述べたように、ゴータマ仏陀（釈尊）の場合のごとく、説法・教化ということの意味する。<sup>①</sup>それは総じて遍歴の教化であり、生死より出離すること、すなわち「出離生死」を課題とするものである。釈尊の場合、その伝道は単に説法にあるのではなくて、総じて遍歴の教化にあるのである。遍歴の教化とは、求道の結果としてのさとりにおいて決定せられた「出家の托鉢・遊行」がおのずから人々の帰依と尊敬とをあつめ、人々を教え導いたということである。ペナレスの説法はいわゆる「初転

法輪」として釈尊最初の教化の成功を物語るが、これはそれ以後四十五年にわたる教化の出発点であるばかりでなく、それ自体、遍歴の教化を意味するのである。遍歴の求道・成道を前提とする必然的結果であるという点からである。もし遍歴の求道・成道がなかったならば、ベナレスの説法は初転法輪として成功しなかったのではなからうか？ ベナレスの説法は仏道の展開に他ならないが、求道・成道を前提とする必然的結果である限り、仏道の一環であり、出家の托鉢・遊行の教化を意味するから、アーシュラマ(往期)の法に基いて釈尊の生涯全体に位置づけて見ることができるのである。すなわち、釈尊における出家以前と出家〔以後〕の托鉢・遊行との連関において評価することができるのである。

今日、釈尊における出家以前は出家以後の托鉢・遊行との連関においてどのように評価されるか？ いわゆる「八相成道」が示すかぎりにおいては成道をもって最主要としその他を従と看なすかのようなものであるが、しかし成道はすでに触れたごとく遍歴の求道をさし措いては成立し得なかったから、その評価は遍歴の求道の評価にかかるのである。ところで、アーシュラマの法に基づくとき、遍歴の求道は釈尊において出家以前の遍歴に位置づけて大きく評価されるのである。「梵行」を修めたこと、「四門出遊」の故事等は、実に釈尊の出家以前の遍歴を示唆するが、これは全体として見ると、ウパニシャッド思想家のアーシュラマの法に同ずるのである。<sup>②</sup>

① 拙稿「サンスクリットと仏教の求道・伝道」(『アルティ』Ⅱ、一九八四年五月)

② 本稿は、拙稿「インド哲人の伝道について」(中村瑞隆博士古稀記念論集『仏教学論集』、昭和六十年二月、春秋社)に接続する。なお、主要文献資料に関しては右拙稿の場合に準ずる。

アーシュラマの法とは、曾てとり上げたように、人間の生涯を四つの時期に区分して全うさせるもので、云わば人

生の四分を意味する。人生の四分とは、ブラフマチャーリン（梵志）、グリハスタ（家住者）、ヴァーナプラスタ（林棲者）、サンニャーシン（遊行者）があらわすものである。ブラフマチャーリンとは、生まれて幼年・少年・青年期にいたるまで学問・修行に従事する者を意味し、学道者と呼ばれよう。「梵志」とは、宇宙の全一者であるブラフマン（梵）——総じて人間の至上の目標——を知りブラフマンとなる淨行に従事する点からいうのである。次にグリハスタとは、成人して結婚し子息を持ち育て、社会人として活躍する者を意味する。「家住者」とは、家を継ぐ家庭人として神々と先祖とを崇敬し、子息を養育する点からいうのである。第三にヴァーナプラスタとは、家督を子息にゆずり、家を出て林を棲処とする者のことである。「林棲者」というのは、「出家」を意味し、人生の最大の課題である出離生死・不死を解くために托鉢（乞食）の修行に従事するものである。第四のサンニャーシンとは、林棲・出家の修行を果たし万国の導師として活躍する者のことである。「遊行者」というのは、仏教の伝える一処不住のあり方に従う者のことで、万国を遍歴し万国の導師として活躍し人生の最後を迎えるのである。

このようなアーシュラマの法は総じて「法典」に規定せられているが、この法の思想的源流をたずねると、ヴェーダーンタとしてのウパニシャッド、とくに初期のウパニシャッドに溯って窺うことができるのである。——往昔、シヴェータケートゥ・アールネーヤという人がいた。ある日、父（ウッダーラカ）がかれに「シヴェータケートゥよ、ブラフマチャーリンの修行をしなさい。わが家では昔から学問もしないでバラモン（婆羅門）の一族だという顔をした者は一人もいないのだから」と云ったので、当時十二歳のかれは師匠の処へ入門して学問に従事し、二十四歳の時にヴェーダの全篇を習得し、得意満面、学問を鼻にかけ、意気揚々として帰って来た。すると父は云った。「シヴェータケートゥよ、あなたはこのたび得意満面、学問を鼻にかけ、意気揚々と帰って来たが、こういう学問を修めて来たのかね？ つまり、それさえ学べば未だ聞かないことも聞いたことになり、未だ思わないことも思ったことになり、未だ知（識）らないことも知（識）ったことになる、といったような学問（教説）をだね」「父上、それは一体、どのような学

問でしようか?」「たとえて云えば、一つの土塊でもって土から作られているものはすべて知ることができる、といったようなものだ。この場合、土器の変異(個別性)は語を手がかりとした名称にすぎない。土のみというのがその真実である。また、たとえて云えば、一つの銅製の装身具でもって銅から作られているものはすべて知ることができる、といったようなものだ。この場合、銅器の変異は語を手がかりとした名称にすぎない。銅のみというのがその真実である。また、たとえて云えば、一つの爪剪りでもって鉄から作られているものはすべて知ることができる、といったようなものだ。この場合、鉄器の変異は語を手がかりとした名称にすぎない。鉄のみというのがその真実である。まあこういう教説のことだ。愛児よ」「先生がたはご存知なかったのですね。もしご存知であったら、私に教えてくださらぬ筈はありません。父上、私に教えてください」「よろしい」。

右に紹介したのは、『チャインドーギヤ・ウパニシャッド』におけるウッダーラカとシヴェータケートゥとの対話のはじめである。両者は父子の関係にあり、父子の対話はこの後、サット(存在・有)とアートマン(自己)との一致を説く点でウパニシャッドの庄巻ともいわれ、特に注目されているが、対話のはじめは、これまで重視されることが少なかったようである。サットとアートマンとの一致を説く対話の本論(正宗分)に対する序分とも見られるところから、これは止むを得ないことも認められるが、対話のはじめは云わば対話の「縁起分」であり、対話全体のアーシュラム的背景を示唆している点で、注目に価しよう。十二歳にしてブラフマチャーリンの修行を開始したというのは、学問を修める当時のバラモンの慣習に随ってアーシュラム第一期の課程の履修に入ったことを意味し、二十四歳でヴェーダの全篇を習得したというのは、アーシュラム第一期の課程を修了しヴェーダ学者(マントラ・ヴィド)となったことを示すもので、これは後世の『法典』における第一期ブラフマチャーリンの学齢期の課程と大体、一致している。ここに注目すべきは、アーシュラム第一期の課程を修了し第二期の課程を修めんとする者に対して新たな学問が奨められていることで、右の対話には、新たな学問がその方法とともに示唆されているのである。「それさえ学べば、未だ

聞かないこと（未聞）も聞いたこと（已聞）になり、未だ思わないこと（未思）も思ったこと（已思）になり、未だ識らぬこと（未識）も識ったこと（已識）になる<sup>⑤</sup>」というような学問こそがまさに修めらるべき学問であり、これは、経験される個々の事物を超えて、事物をして事物たらしめるとともに、さらに事物が帰すべきところの究極の存在（サット・ブラフマン）を解くものである。縁起分に続く対話全体において、このことは人間が自己の向上・完成のために修めるべき自覚者（アートマ・ヴィド）の学問として「それ」（タット）「あなたはそれ」<sup>⑥</sup>（タット・トヴァム・アシ）を中心に説かれているが、ウッダーラカによると、この自覚者の学問こそ、総じて不死の課題に應えるもので、人間がアーシュラマの第二期以降、生涯をかけて修めるべき学問であって、これはかれの息子シヴェータケートゥによって未永く伝えられることになったのである。父子の対話の結びにいう、「ここにおいてかれは父の教えを十分に了解した」<sup>⑦</sup>。

この場合、「十分に了解した」というのは、「かれは識った、かれは識った」とくり返されている点から認められるのであって、師ウッダーラカの教えは弟子シヴェータケートゥおよび対話の伝承者には自明の事柄であった筈であり、読者によって十分に了解さるべきものであることをアピールしているのである。この意味においてシヴェータケートゥは「如是我聞」が示す經典誦出者の場合のごとく、自ら求道を果たすとともに他をして求道を果たさしめんとしたものであると云うべきではなからうか？

「かれは識った、かれは識った」という父子の対話の結語は、理由なくして卒尔に出たのではない。対話全体の首尾照応という点から注目されるのである。「それさえ学べば未だ聞かないことも聞いたことになる云々」と述べるのは、未聞が已聞となり、未思が已思となり、未識が已識となる学問教説をとり上げているのであり、「かれは識った」とはこのような未聞未思未識を已聞已思已識たらしめるもの、すなわち「それ」を識ったことを示す。未識を已識たらしめるものとは、ウッダーラカにおいては宇宙の根本原理サットであり、サットから展開した火<sup>アイジャス</sup>・水<sup>アイパス</sup>・地<sup>アンナ</sup>（食の三神格（三要素）にサットが生命<sup>ジーツアートマン</sup>我をもつて入り、名色<sup>ナーマルupa</sup>（個物）を展開し、三神格をそれぞれ三様ならしめたの

であるから、総じて個物の変異は実在せず、すべて語を手がかりとする名称にすぎない<sup>⑨</sup>というものである。ウッダーラカはこの説が昔の大学者たちの承認するものであることを述べて、次のごとく自らの確信のほどを示すのである。「これは昔の大富有の大学者たちがこれを知って、いまや何人もわれらに未聞未思未識の説を語り得まいと云ったのだ。というのは、かれらはこれら三神格(三要素)によってかように知ったからである。すなわち、すべて赤く見えるものは火の色、すべて白く見えるものは水の色、すべて黒く見えるのは地の色であって、未識のごとくなるものはすべてかの三神格の集合にすぎないと知ったのである<sup>⑩</sup>」。

ウッダーラカのこのような確信は単に昔の大学者たちに同調した結果ではない。このような確信の披瀝につづいて、かれは人間存在における三神格(三要素)の三様化——食所成(意・水所成(息・火所成(語)——について、日常生活の経験に徴しつつ具体的に触れ、万物がサットを根本とし依所・基台としていることを述べ、総じて人間について次のように明かすのである。「愛児よ、この身体は火に牽き去られた水より生じた芽であると知るべきである。これには根本がないはずはない、と。その根本は水以外のどこにあり得よう。愛児よ、芽としての水によって、根本たる火を尋求しなさい。芽としての火によって、根本たるサットを尋求しなさい。愛児よ、この宇宙の一切生類はサットを根本とし、サットを依所とし、サットを基台としているのだ。愛児よ、人間が死すとき、その語は意に入り、意は息に、息は火に、火は最高神格(サット)に入る。この微なるものこそ、この一切が本性とするものである。それは真実であり、それはアートマンである。シヴェータケートゥよ、あなたはそれなのだ<sup>⑪</sup>」。

「この微なるもの」以下「あなたはそれなのだ」にいたる一連の言葉は、この後、ウッダーラカが種々のたとえ話を交えてくり返し述べているもので、いわば「定型句」であるが、これは、万物の本性・真実・アートマンにしてあなたの「それ」なるサットの現証をアピールしているのである。ここには、宇宙と人間との解明が同時に進行し、「あなたはそれ」において宇宙観と人間観との統合が成立していると云うことができる。

注目すべきは、右の定型句がくり返される毎に、「父上（尊師）、さらに教えてください」「よろしい、愛児よ」<sup>⑭</sup>とくり返されていることである。この対話の言葉は、結局、定型句をくり返し強調させたことになっているが、定型句はじめて述べられる以前にもくり返されているところから見ると、父子の対話全体は総じて父子の間柄を超えて、師弟の敬愛の情に支えられた真摯な求道・伝道の展開であることを窺わせるのである。ヴェーダ学者とは別格の自覚者<sup>ヴィドヴァー</sup>ウッダーラカの学問精神というものが、真摯な求道者<sup>ジニヤヤー</sup>シヴェータケートゥを温かく迎えて自らの抱懐する学問教説をヴェーダーンタとして開陳した観があり、ウッダーラカの自覚の教説の、一味写瓶といった伝授の趣を思わせるのである。昔の大学者たちの発想に刺戟せられたとしても、宇宙観と人間観とを統合した自覚の教説には真摯な求道者を偏に帰依・随順させるものがあつた。それゆえ、まさしく「かれは識つた」のであろう。

かれが識つた「あなたはそれなのだ」ということは不滅の真理であり、不滅の真理として末永く伝えられねばならない。このようにして真摯な求道者の求道の成果（得道）が父子のいきの合った対話として記録されることになったのであろう。

- ① 拙著『宗教的生涯教育へアーシユラマ法と仏教からの提言』（昭和五十七年三月、あぼろん社）
- ② *Ch[āndogya-] U[paniṣad]*, VI, 1.
- ③ *ChU*, VI, 2~16.
- ④ 後世の『法典』の記載とは完全には一致しない。ブラフマチャーリンとなるのは、バラモンの場合、受胎後八年、あるいは五、七、九、十年ともなすと云われる。
- ⑤ *yenāśrutam śrutam bhavati, amataṁ matam, avijātaṁ vijātaṁ iti* (*ChU*, VI, 1, 3).
- ⑥ *tat tvam asi*. この言葉は、第八章第七にはじめて見え、以下の各章におおつくり返されている。
- ⑦ *tad dhānya vijāṇav iti vijāṇav iti* (*ChU*, VI, 16, 3; cf. *ChU*, VI, 7, 6).
- ⑧ *ChU*, VI, 2, 1~4; VI, 3, 2 ff.~VI, 4, 1 ff.

- ⑨ *ChU*, VI, 4, 5~7.  
 ⑩ *ChU*, VI, 5, 1~4.  
 ⑪ *ChU*, VI, 8, 5~7.  
 ⑫ *sa ya eṣōṇimā atad ātmyam idam sarvam, tat satyam, sa ātmā : tat tvam asi, śvetaketu, iti.*  
 ⑬ 注 6 参見。  
 ⑭ *bhūya eva mā, bhagavān, vijñāpayatv iti, tathā saumya, iti hovāca (ChU, VI, 8, 7).* この言葉は、以下の各章に見える。  
 ⑮ *ChU*, VI, 5, 4; VI, 6, 5.

### III

ウッダーラカ・シヴェータケートゥ父子の対話はこのようにして、求道者の求道に応えた自覚者の教導のモデルとして種々に評価されうと思う。が、ここでは、総じて人間をして求道者・道<sup>アシュムラカ</sup>人たらしめる自覚の教説があり、生死を超えること、出離生死という人間の課題の解明が教説の核心をなす点、とくに留意さるべきであろう。

では、出離生死の課題はこの教説においてどのように解かれていくか？ ということに、要約すれば、サットの現証にものとづく正定位（不退位）の確立によって十分に解かれるとするのである。ここにサットの現証とは、「現観される直証的なブラフマン（全一者）すなわち万物に内在するアートマン（自己）<sup>①</sup>」であるサットを知ることにはかならないから、サットの智慧といってよいが、現実の経験に徹して明かされる点から尔いのである。已にサットの智慧にいたれば、老死の恐怖を超えて正定・不退の境地が確立し、出離生死が果たされることになる。ウッダーラカにおいては、総じて万物がそれから展開しそれに帰入するサット（ブラフマートマン）を根本とし依所・基台としているのが人間である。人間は死するとき、その語は意に入り、意は息に、息は火に、火はサットに入り、何人もこれを知ることがない。



けれどもこの微なるものこそ、一切が本性とするものであり、真実であり、アートマンである。シヴェータケートゥよ、あなたはそれなのだ、と強調される。ここには、サットの智慧——すべての未識を已識たらしめる——にもとづく不動の確信が表明されている。サットの智慧はこの場合、ウッダーラカにおけるサットの現証であり、サットの現証はウッダーラカ自身の正定位を確立しているのである。このことは、「シヴェータケートゥよ、あなたはそれなのだ」が単にくり返されているのではなくて、経験の實際に徴してのサットの現証をアピールしている点から明らかである。「あなたはそれ」とは「私はそれだ」という、ウッダーラカ自身のサットの現証の表明であり、サットの現証をシヴェータケートゥに対して偏えに奨めているのである。種々のたとえ話を交えながら「あなたはそれなのだ」とくり返し説かれている点に留意しなければならない。「シヴェータケートゥよ、あなたはそれなのだ」とくり返しているのは、サットの現証とこれにもとづく正定位の確立をば、シヴェータケートゥを通じて万人に奨めているのである。ただこの場合、自覚者の教導がどのように懇切であろうとも、自覚者の教説に対する信頼が要件である。それなくしては自覚者の教導は到底、成就し難い。かくしてシヴェータケートゥに対する求道へのいざないは、「愛児よ、信じなさい」①と言って「あなたはそれ」への信を告示することになった。「信じなさい」というこの言葉は、シヴェータケートゥを通じて「あなたはそれ」への信を万人にすすめているのである。ここに信とは疑なく知ることを意味する。「あなたはそれ」と疑なく知るべきである。「あなたはそれ」こそがサットの現証による正定位を確立し、出離生死を果たさしめる。このように奨めているであろう。

① yad eva sākṣād aparokṣād brahma, ya ātmā sarvāntaraḥ, tam... (Bṛhadāraṇyaka-] Upaniṣad, III, 5, 1; III, 4, 1). ここにとり上げられるブラフマンすなわちアートマンというのは、後述するように「あなたのアートマン」であるから「あなたはそれ」といって示されるサットにはかならない。

② śraddhatsva, saumya (ChU, VI, 12, 2).

現観される直証的なブラフマンすなわち万物に内在するアートマンがサットであると云ったが、これは同時代の他のウパニシャッド思想家において「あなたのアートマン」として解かれるものである。それは呼吸からも直接に知られる。現に呼吸をもって息しているもの、吸気をもって息しているもの、介気をもって息しているもの、上気をもって息しているものである。①けれども生命の主体であるから、見聞意識することはできない。「あなたは見るという作らきの主体である見者を見ることはできません。聞くという作らきの主体である聞者を聞くことはできません。意うという作らきの主体である意者を意うことはできません。識るという作らきの主体である識者を識ることはできません」②。総じて云えば「他より見られざる見者であり、聞かれざる聞者、意われざる意者、識られざる識者であります。しかも、このものより他には見者もなく、聞者もなく、意者もなく、識者もないのです」③。

ここに紹介したのは、ウッダーラカの弟子と伝えられるヤージニャヴァルキヤによって説かれた万物内在のアートマンで、不死の内制者といわれ、智慧の指標としてさらに次のように説かれるのである。「かくのごときものがあなたのアートマンであり、内制者・不死者である」④。「それは飢・渴・憂悩・愚痴・老・死を超えています。このアートマンを知ってバラモンたちは兒子や財産や世界への希望を捨てて、托鉢行（乞食行）に従事するのです。というのは、兒子への希望は財産への希望であり、財産への希望は世界への希望であって、相對するこの兩項は同一の希望にすぎないのです。このゆえに、バラモンは学究の立場を捨てて嬰童（無智）の立場に立たねばなりません。やがて嬰童の立場をも学究の立場をも捨てたときに、牟尼（寂黙）となります。そして非牟尼の立場をも牟尼の立場をも捨てたときにはじめて真のバラモン（梵智者）となるのです」⑤。「何によってそうなるのですか？」「何によってもです。これ以外のものはすべて苦であります」。

ここに、老死の苦を超えた不滅の内制者アートマンを主題として出離生死の道が説かれている。ヤージニャヴァルキヤのこの説は、ウッダーラカのサット・アートマンに対応しつつ、出離生死のため、不滅の内制者アートマンの探求を奨めるものである。この場合、注目すべきは、アートマンの探求がアートマンの学問からはじまりアートマンの智慧に究まるべきであるということである。このことは、バラモンが托鉢行（乞食行）に従事しながら学究位を超えて遍歴の修行を果たし、嬰童位・牟尼位を経て真のバラモン智者になるという点に窺うことができるもので、この点はアーシユラマの法、とくに第三期以降の法を指示しているのである。およそ人間として生まれ、学問・修行に従事するのは、成長して立派な大人となり家庭人・社会人として有用の活動をなすためであるが（第一期・第二期）、しかし人間はこれだけで生涯を全うすることはできない。老死の問題を解かなければならないからである。老死の問題を解くために家庭人・社会人の地位を離れ（出家）、遍歴しつつ求道を果たさなければならぬ（第三期ヴァーナプラスタ）。かくてヤージニャヴァルキヤにおいては、学究・嬰童・牟尼の諸位を超過する求道者の自己批判のめど（目処）が次のように提起されるのである。

人はすべて欲望に従って意志を決定し、意志通りに行為し、その行為に相応したものとなる。およそ欲望に絆されたものはその意志・行為によって生死輪廻する他なきものであるが、欲望に絆されざるもの、つまり、欲望なき人、欲望を脱し、欲望を成満し、アートマンを欲望対象とするものは、不滅のブラフマンに趣く。古詩にいう、人の心臓に宿れる欲望のすべてが離散するとき、死すべきものは不死となり、ブラフマンにいたる、と。<sup>⑥</sup>

それゆえ求道者は、古詩における聖者のごとく、欲望のすべてが離散するように精進し努力しなければならない。欲望の離散において求道者は自己批判を果たし、不滅のアートマンの智慧にいたり、無畏の正定位を獲て不死となる。かくてアートマンの智慧をめざす離欲の托鉢行が奨められるのである。<sup>⑦</sup>

ヤージニャヴァルキヤにおいては、このような離欲の托鉢行こそ牟尼・非牟尼を超えて真のバラモンとなる所以で

ある、ということを示唆しつつ、眞のバラモンが次のように称揚されるのである。——「古詩にいう、これはバラモンの永恒の偉大であり、行為によって増減するものではない。人はかれをばその足跡を辿って知るべきである。かれを知ったならば、悪行によって染汚されることがない、と。このゆえに、かように知って心を鎮め（寂靜となり）、五官を制し、世情を棄て（安祥となり）、苦鍊に堪え（忍耐強く）、三昧に入り、アートマンにおいてアートマンを見、万物の本体であるアートマンを見るならば、罪苦はかれを敗り得ないで却ってかれが罪苦を敗るのです。罪苦はかれを悩まし得ないで却ってかれが罪苦を焼尽するのです。かれは罪苦を離れ、楽欲を難れ、疑惑を離れたバラモンとなるのです。かくのごときがブラフマン界です。王様はこの無畏の境界に到達されたのです」<sup>⑧</sup>。

右に紹介したのは、当時のバラモンを代表するヤージニャヴァルキヤとヴィデーハ国のジャナカ王との数次にわたる対話の最後を飾るものである。内制者アートマンを主題として王を懇切に教導し、王の課題である出離生死を解いて、ここにヤージニャヴァルキヤは王に対して無畏を保証するのであるが、注目すべきは、教導せられた王が単に謝意を示したのでなくて、導師に随順し、導師の伝道を末永く顕彰するとともに、離欲の托鉢行を肯定している点である。王曰く、「私はいま先生にヴィデーハ国を献上します。私自身をもいっしょにさし上げます」<sup>⑨</sup>。両者にはすでに数次の対談があり、「私は象ほどの牡牛をそえて千頭の牝牛を献上します」<sup>⑩</sup>と言明した王がヤージニャヴァルキヤから無畏を保証されたにしても、いささかオーバーな感謝の言葉に聞えるかも知れないが、出離生死（不死）の教法の貴重な伝受の過程を示唆しているのである。貴重な伝受の過程とは、いまや不死・無畏の教法を完全に聞き了った随聞者として、ジャナカ王がヴィデーハの国および国民を代表して正にみずからの為すべきことを言明し、国民とともに導師の完全な随行者となることを誓っている点から認められるのである。「ヴィデーハ国を献上します云々」は導師に対する王の全幅の信頼の表明であるが、明らかに王の「出家発心」ということを示唆している。これは王権を超えたアーシュラミカ道人として第三期の法「捨家棄欲」を発趣するもので、出離生死の教法の伝受が成功したこ

とを告示しているのである。不死の教法を末永く全人類に開放する、これは「発菩提心」というべきではないか？  
ウィデーハ国の献上を申し出たジャナカ王にはいまやこのような発菩提心しか無かったのではなからうか？

『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』<sup>⑪</sup>には、ジャナカ王のほかにマイトレयीーが登場し、ヤージニャヴァルキヤとの間に問答対話の記録を残している。この記録は、マイトレयीーがヤージニャヴァルキヤの妻であるところから、出離生死の課題の解明に関して格別な意義を発揮しているのである。この点、夫妻の対話の因縁を語る序文から注目しなければならない。――さてヤージニャヴァルキヤには、マイトレयीーとカーティヤーヤニーという二人の夫人があった。この中で、マイトレयीーはブラフマン学者であったが、カーティヤーヤニーは賢夫人というにすぎなかった。ある日、ヤージニャヴァルキヤは新たな生活に入ろうと決意して云った。「マイトレयीーよ、私は現在の生活を捨てて遊行に出ようと思っているので、あなたとカーティヤーヤニーのために財産の処分をおきたいと思う」「あなた様、この大地が私のために財宝で満たされたとして、私はそれでもって不死となるのでしょうか？」「それとも、駄目でしょうか？」「それは駄目だ。金満家たちの生活ができるというだけだ。不死は金銭で買える見込みがない」「私が不死となるのに役立たないようなものを頂いてもつまりません。あなた様がお悟りになったことを私に教えてください」「あなたは私の恋人房だが、可愛さが今さらにのって来た。さあ、私はここで委しく話すから、注意してよく聞きなさい」<sup>⑫</sup>。

このようにして夫妻の間に問答対話をもって展開されたのは、要するところ、アートマンへの愛というものである。曰く、この世の中には愛すべきものが多いけれども、すべての愛の中の愛、至上の愛というべきものはアートマンへの愛（アート・カーマ）であり、アートマン愛というものをさし措いて他にはない。まさに見るべきもの、聞くべきもの、意うべきもの、識るべきものは、実にアートマンであり、アートマン以外にはない。アートマンを見聞意識したならば、すべてを識ったのだ。それゆえ、偏えにアートマン愛に生き、一切を温かく抱擁するように精進して

行かなければならない。<sup>⑬</sup>

対話篇はヤージニヴァルキヤがこのように説いてのち、マイトレイー夫人と別離し出家遊行に出立したと結んでいる。<sup>⑭</sup>ここに、出家遊行が離欲の托鉢行を意味し、不死の法の施与、法施が万人に開放されていると云うことができよう。法施とは、フートマン愛において自ら「愛別離苦」を乗り越えた遍歴者の、万人に対する求道へのいざないである。それはフートマン愛において悉く「愛別離苦」を乗り越えさせるところの教導であると云うべきではなからうか。

① *BU*, III, 4, 1.

② *BU*, III, 4, 2.

③ *BU*, III, 7, 23.

④ *Cf.*: *essa ta ātmāntaryāmy amīṭaḥ* (*BU*, III, 7, 23); *essa ta ātmā sarvāntaraḥ* (*BU*, III, 4, 2).

⑤ *BU*, III, 5, 1; *cf.* *BU*, IV, 4, 22.

⑥ *Cf.* *BU*, IV, 4, 5~7.

⑦ *Cf.* *BU*, IV, 4, 22: *tam etaṁ (ātmānaṁ) vedānuvacanena brāhmaṇā vidiṣanti...*; *etam eva viditvā munir bh-*

*avati*; *etam eva pravrajāno lokam icchantāḥ pravrajanti*; *etad dha sma vai tat pūrve vidvāṁsaḥ prajān na kām-*  
*yanti ... atha bhikṣā-caryāṁ caranti.*

⑧ *Cf.* *BU*, IV, 4, 23~25: *essa brahma-lokaḥ, samrāt; enaṁ prāpi'o'si ... sa vā esa mahān ajātmā, ajaro, amaro'-*  
*mīto bhayo brahma; abhayaṁ vai brahmā, abhayaṁ hi vai brahma bhavati ya evaṁ veda* (*cf.* *BU*, IV, 2, 4).

⑨ *BU*, IV, 4, 23: *so'haṁ bhagavate vidēhān dadāmi, māṁ cāpi saha dāsyāyēti.*

⑩ *hasty-ṛṣabhaṁ sahasraṁ dadāmi* (*BU*, IV, 1, 2 ff.; *cf.* *BU*, IV, 3, 14; IV, 3, 33).

⑪ *BU*, IV, 5, 1~15.

⑫ *BU*, IV, 5, 1~5.

⑬ Cf. *BU*, IV, 5, 6~15. na vā are sarvasya kāmāya sarvaṁ priyaṁ bhavati, ātmanas tu kāmāya sarvaṁ priyaṁ bhavati. ... ātmani khalv are dṛṣṭe, śrute, mate, vijnāte, idaṁ sarvaṁ viditam (*BU*, IV, 5, 6).

⑭ Cf. *BU*, IV, 5, 15: ity uktānūsasanāsi, maitreyi; etāvad are khalv amṛtatvam, iti hoktvā, yājñavalkyo vijāhāra.

〔付〕はじめ、本稿は、出離生死のため求道の旅に立出したナチケータスをもとり上げる予定であった。が、対話篇を拵ってウパニシャッドの伝道を支えた求道の精神というものに触れている間に、予定の紙幅を超えたので、ひと先ず筆を擱く。ウパニシャッドの求道の精神とはなにか？いろいろな解明の余地があり、本稿ではまだ十分に明かされてはいないが、ウパニシャッドが「不惜身命」の精神を中核として伝えていることは確かであり、この点、釈尊の仏道精神というものに対応させることができよう。